

〈民主〉と〈愛国〉

小熊英二〔著〕

戦後日本のナショナリズムと公共性



(新曜社・966円・6300円)

62 助教授 大助 慶応大 小島 62
おぐま・えいじ 62
年生まれ。慶応大助教授。著書に『単一民族
神話の起源』『＜日本
人＞の境界』『インド
日記』など。

〔評者〕
与那原 恵

思想言語の使用法で戦後を再考

日本人が自分たちを単一で均質な民族として語る「単一民族神話」は、いつ、どのように発生し語られてきたのか。さらに、その「日本人」とはこの範囲を指したのか、日本の「境界」を検証してきた小熊英二の今回のテーマは「戦後思想」である。

敗戦から一九七三年ごろまでの言説を検証し、その変質過程を浮かび上がらせた本書は、圧倒的な分量にもかかわらず、ぐいぐいと読ませ、じつに刺激的な一冊である。前二作同様、私たちが自明のものとしてとらえている概念の曖昧さを照射する。

「われわれが使用している言語は、歴史的な経緯のなかで生み出され、変遷してきたものである。そのなかには、『市民』『民族』『国家』『近代』といった、ナショナリズムや『公』を語る基本的な言語が含まれている。そして本書における『戦後』の再検討はいささか言葉の使用法がいかなる変遷を経てきたのかの再検討でもある。たとえば『市民』の定義ひとつにしても、かつて使われた意味と現在イメージするものとは大きく異なる。『民族』も左翼

運動のなかで違和感なく「平和」や「自由」と共存し、保守が憲法擁護を掲げた時代があった。著者はこのような言説が戦前と結ばれていたことを説き明かしている。

荒正人、清水幾太郎、竹内好、丸山眞男、さらに吉本隆明、江藤淳、鶴見俊輔……。

「戦後知識人」としてひとつにくみられる彼らだが、世代の溝は意外に深い。じつさに戦場に赴いたのか、そうでなかったのか。また戦場での体験がのちの思想に深く影響している。著者は、知識人たちが体験を言葉にし、思想化する「心情」を読みとってゆく。個々のパーソナリティーが丁寧に描かれており、ひとつの言説が生み出される背景を身近に感じることができた。

いまナショナリズムをめぐる論争が盛んだが、そこに「心情」はあるのだろうか。「戦後」の多彩で、複雑な思考の積み重ねを見つめ直すことなしには、ゆたかな論議は成立しないのではないか。著者は心情を表現する「言葉」こそが必要だという。私も新たな言葉の創出に希望を近づけた。

（フリーライター）